

September
号外
2014

過去と現在を行き来しながら、
未来を考える壁新聞
上町台地
今昔タイムズ

上町台地 今昔フォーラム
vol.2 Document

企画・編集 U-CoRoプロジェクト・ワーキング／発行 大阪ガス エネルギー・文化研究所(CEL)
問合せ先 tel.06-6205-3518(担当:CEL弘本)※U-CoRo=ゆーころ(上町台地コミュニケーション・ルーム)
ホームページ <http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/ucoro/index.html>

U-CoRo Step2 壁新聞プロジェクト関連イベント

第2回「上町台地 今昔フォーラム」の まち歩きを開催しました。



テーマは“台地の遠足 浪花の町衆が愛した
「自然」身近な名所・名産・遊山・風景～”



壁新聞「上町台地今昔タイムズ」
第2号(第1面)



今回の案内人は
島本多敬(しまもと・かずゆき)さん
現在、京都府立大学大学院文学研究科史学専攻・博士前期課程に在籍する若手の研究者

大阪ガスの実験集合住宅実験NEXT21の
2階ホールに集合、まずは簡単なガイド

上町台地 今昔フォーラム vol.2 (まち歩き)

■日時: 2014年9月23日(祝・火)
14:00 ~ 17:30

■コース: NEXT21(ガイダンス)
⇒ 東雲稻荷神社(玉造稻荷神社
分社) ⇒ 越中井 ⇒ 玉造稻荷神社
⇒ 三光神社 ⇒ 真田山陸軍墓地
⇒ 興徳寺(小橋寺町) ⇒ 城南寺町
⇒ 中寺町 ⇒ 高津宮

■主催: 大阪ガス エネルギー・
文化研究所(CEL)

企画: U-CoRoプロジェクト・
ワーキング・島本多敬

■案内人:

島本多敬さん

(京都府立大学大学院文学研究科
史学専攻・博士前期課程)

2014年9月23日に、U-CoRoプロジェクトの「上町台地今昔フォーラムVol.2」として、上町台地のまち歩きを25名の参加者を得て実施しました。

テーマは“台地の遠足 浪花の町衆が愛した「自然」～身近な名所・名産・遊山・風景～”。案内人は京都府立大学大学院の島本多敬さんで、主に18世紀末以降の江戸時代に焦点を当て、都市大坂の住民が親しんできた上町台地の風景と、そこに向けられた当時の人の眼差しを感じてみようというのがその趣旨。同時に、現在の景観に残された過去とのつながりを歩きながら再発見しようという試みでした。



出発前に地域の活動に関する資料も配布。高齢者外出介助の会の永井佳子さんは、同会が発行している「からほり新聞」を紹介。

大阪ガスの実験集合住宅
NEXT21
(大阪市天王寺区清水谷町6)



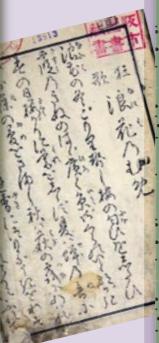
秋の好天に恵まれ、「台地の遠足」にさあ出発!



江戸時代の二人の眼差しを手掛かりに

島本多敬さんが、江戸時代（とくに18世紀以降）の大坂の人々の「自然」の「愛し方」を見るために、今回、先導役として取り上げたのは、次の2人の人物でした。

「名所案内記」とともに
「遠足」に出発



白縁斎梅好（1737-1802）

江戸時代の末頃、今橋二丁目に住んでいた狂歌師・書肆。安永7（1778）年に『絵本名物浪花のながめ』（以下『浪花のながめ』）、寛政12（1800）年に『画本狂歌浪花のむめ』（以下『浪花のむめ』）を著し刊行。両書には実際に訪れたさまざまな場所・風景について、狂歌を交えつつ細かに、またユーモラスに見つめた記述がみられる。

（『浪花のむめ』白縁斎梅好、大阪市立中央図書館所蔵）

暁鐘成（1793-1861）

大坂三郷に生まれ育ち、幕末期に活動した浮世絵師・戯作者。近世大坂の代表的な名所案内記である秋里籬島の『摂津名所図会』を受け継ぐ『摂津名所図会大成』（安政2[1855]年以降、近世当時は未刊行）を著した人物。今回は小型の名所案内記『浪華の脇ひ』（安政2年）から、幕末期における上町台地の名所のエッセンスを捉える。

（『浪華の脇ひ』暁鐘成、大阪市立中央図書館所蔵）

NEXT21

伊勢神宮への参詣道、暗峠・奈良街道の出発点

NEXT21を出発して清水谷高校の西側から長堀通をわたり、まず足を向けたのは、「東雲稻荷神社（玉造稻荷神社分社）」。その境内に、付近にあった暗峠・奈良街道の道標が移転されています。江戸時代の玉造の地は、大坂から伊勢神宮に向かう参詣道の出発点でした。



ここは昔の旅の起点の地



東雲稻荷神社 (玉造稻荷神社分社)



この神社の北側を旧道が通っていたと説明する島本さん。江戸時代の大坂から東の方向に旅立つ出発地がこの付近だったといいます。

暗峠・奈良街道の道標

（中央区上町1丁目8）

伊勢神宮への参詣道となっていた暗峠・奈良街道が玉造地域を東西に走っており、現在の長堀通の一筋北にある旧道に面した東雲稻荷神社（玉造稻荷神社分社）の境内には、かつての街道筋にあった道標が移転され現在も残っています。



正面 文政四辛巳春
左面 右にすぐハ京橋
左面 にしハ安堂寺
背面 文政四辛巳春

かつて旧道にあった道標には、伊勢への道や「大師めぐり」の案内などの文字が彫り込まれている。



道標と相続講碑が元あった位置の説明板。

近くにあった相続講碑もこちらの境内に移されている。



当日のまち歩きコース



越中井 (中央区森ノ宮中央2丁目12)
この井戸の名は、豊臣期の16世紀末頃、付近に細川越中守忠興の屋敷が置かれていたことに由来します。この伝承がいつ頃からみられるようになったかは未詳ですが、寛政10（1798）年に刊行された『摂津名所図会』の「越中井戸」の項目には「むかし細川越中守の台所の井といふ」とあり、遅くとも18世紀末までには、かつての武家屋敷との関連でこの井戸が語られていたことが知られます。井戸の傍らに碑があり、戦後に大阪の郷土史家・牧村史陽が記した案内板とともに、忠興の婦人ガラシャが関ヶ原合戦に際し自害したエピソードを今も顕彰しています。



まち歩きの折々に
クイズに解答！



島本さんは、「台地の遠足」の所々で、江戸時代の大坂の暮らしに思いを馳せるクイズを参加者に出題。

上町台地の水資源—豊富な伏流水と井戸

「越中井」は上町台地の井戸水の重要性を伝える場所のひとつ。上町台地には伏流水が豊富なため各所に井戸が多数つくられ、「金龍清水」「増井清水」など、現在でも多くが固有名前と伝承を伴って残されています。

越中井



台地の水を考える



島本さんの出すクイズの第1問は、越中井にちなんで、江戸時代の大坂の飲用水に関するもの（右の三択問題）。参加者は、正しいと思う答えにそれぞれ挙手で回答。

越中井のすぐそばにある石碑は昭和（1934）年に建てられ、揮毫は徳富蘇峰の手によるもの。その隣の「史蹟 越中井由来」には細川ガラシャ自害の事績が記されている。

- Q 19世紀半ばに起稿し、当時の文化・風俗と京阪・江戸の間での違いを詳細に記した長谷川守貞『守貞謹稿』には、大坂三郷（とくに台地以西）の水について以下のよう評されています。
空白には、次のどの言葉が入るでしょうか？
「大坂ハ、井水[]」
- ①塩気ヲ帯ブ ②常ニ濁ル ③至ッテ少ナシ



墓碑が立ち並ぶ慰霊空間へ

三光神社の西側には、木々の間に数多くの墓碑が立ち並ぶ厳かな空間が広がっています。ここは旧真田山陸軍墓地。真田山陸軍墓地維持会 常務理事の吉岡武さんにおいでいただき、この慰霊空間の成り立ちと現状などについてお話をいただきました。



墓地のなかには、空襲の爆撃で破壊され各所に散らばっていた墓石を集めた一画も。

旧真田山陸軍墓地



平和への祈りと
鎮魂の思いを胸に



吉岡 武さん
(公益財団法人
真田山陸軍墓地
維持会 常務理事)

旧真田山陸軍墓地は明治4(1871)年に設けられたもの。全国で現存する80余りある陸軍墓地の中でも最初につくられ、かつ最大の墓地です。約4600坪の広大な土地に西南戦争以後の戦没者や戦病者、また軍兵士のご遺骨8200余柱を収める納骨堂があります。この納骨堂は、戦後は事實上放置されていましたが、夫などのお墓が約5300基あり、さらには太平洋戦争で亡くなられた数年前から専門家グループが詳細な調査を始めています。私たちにはこの貴重な墓地の保存活動を長年続けており、一般的の方向けにも、月に一度、墓地の案内会※を実施しています。

※ご希望に応じて個別の案内も実施されています。
問い合わせは、06-6762-0420(吉岡)まで。

真田山陸軍墓地維持会は、剥離・崩落が進む墓碑をはじめ、貴重な墓地を保存し慰霊するために活動されている。この日は吉岡さんに、広大な敷地に長きにわたって築かれてきた、それぞれの時代の特徴的な墓域をご案内いただいた。

寺院が密集する寺町は、江戸時代の周遊ポイント

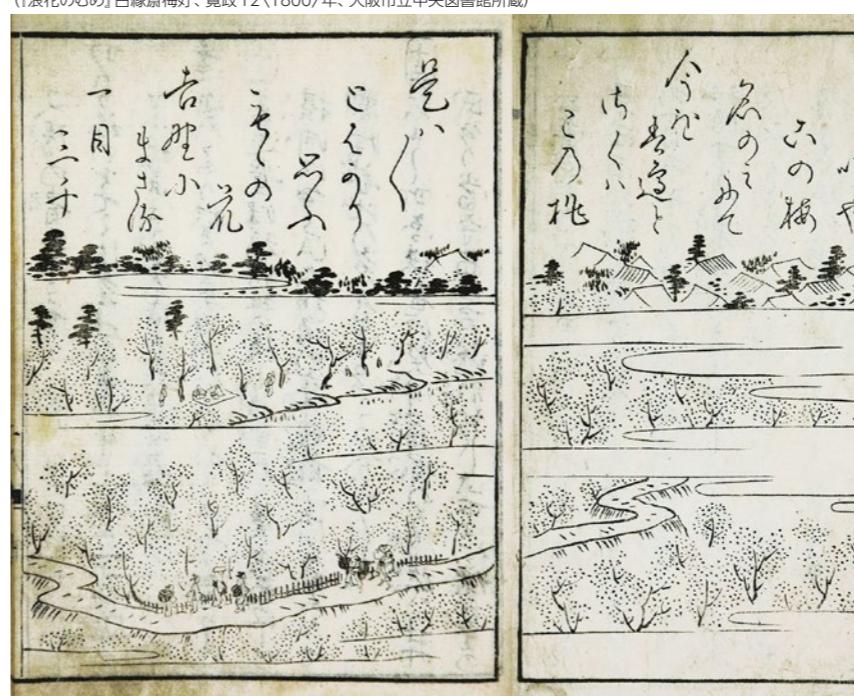
小橋寺町・城南寺町・中寺町

大坂三郷には全部で11の「寺町」が存在し、現在でもこの付近には「小橋寺町」「城南寺町」「中寺町」と呼ばれる寺院が密集する地域が残されています。寺町の造成は豊臣家が大坂を支配していた天正年間(16世紀末)からはじまり、大坂城から四天王寺に至る南北の町家(南・北平野町)を東西から挟むように配置することで、天満や四天王寺・夕陽丘付近の寺町とも合わせて、豊臣期の城下町大坂の防衛ラインとしたことが指摘されています。

台地の上の寺町へ



心眼寺坂の上に見えるのは土塹の向こうに立つ大きな観音像。そこが、「遠足」の次の目的地 興徳寺(小橋寺町)。



札所めぐりは
「行楽」の一種



興徳寺 (小橋寺町)

興徳寺門前でクイズ第3問。江戸時代、春の季節に愛でられた当地の花景色は?



中寺町に向かう途上、辻にあった道標の文字を解説する島本さん。文字に携帯電話の光を当てる、見えやすくなるという裏技も紹介。

都市の中の札所を巡り、名所を訪ねる

〈都市内の札所を巡る〉

江戸時代の大坂では、観音や地蔵など信仰の対象ごとに決まった縁日に、札所となっている寺社を巡る「都市巡礼」が盛んでした。ルートの総距離は3~4里のものが多く、当時の人々にとっては信仰を兼ねた「行楽」の一種だったと言えます。近松門左衛門の「曾根崎心中」の冒頭に記され、大変なゲームとなっていた観音三十三ヶ所や、弘法大師廿一ヶ所(大師めぐり)などが、その代表で、巡礼の札所をいくつか兼ねる寺社も多くありました。また、盂蘭盆の時期には、「七墓参り」として、7つの墓所(梅田・浜・葭原・野田(蒲生)・小橋・鶯田・千日)を巡る行事もありました。



東高津公園で、付近は江戸時代に墓所だったところと説明する島本さん。かつては「七墓参り」など墓所巡拝や近くにあった味原池への行楽に多くの人出があった場所。

城南寺町を通り



中寺町を進み



寺町の土壁が続き、寺町の風情を今も色濃く残す中寺町を南に向かい、高津宮へ。

クイズ Quiz 3

Q 白縁斎梅好は『浪花のむめ』のなかで、「また玉造どんどうより真田山南ハ大師めぐりの道すがら、東西南北[]に見上げ見おろす風景は、吉野山の一目千本より色よく」と評し、都市巡礼の折に見えるある風景を愛でています。さて、それは次のどれでしょう?

- ① 桜の花盛り ② 桃の花盛り ③ 菜の花盛り



島本さんの
ボイス解説

〈台地の名所を訪ねる〉

寺町の寺院には、当時の案内記にも載せられた名花名木のある庭園が多く、それを目当てに多数の人々が訪ねました。さらに、上町台地西側の崖の樹林帯、台地上と味原池などの周辺に生育する梅林が、自然と触れ合う場となっていました。また、誓願寺にある井原西鶴や懐徳堂学主中井家の墓、方妙寺(現在、寺院は移転)にある近松門左衛門の墓など、中寺町から八丁目寺町にかけては、知識人や文芸関係の著名人の菩提寺がいくつもあり、墓所を訪ね遺徳をしのぶ場ともなりました。



眺望の名所から「なにわのながめ」に思いを馳せて

NEXT21からスタートし、玉造から真田山、寺町などをぐるりと回ってきた「台地の遠足」もいよいよ終盤。中寺町を抜けて、ゴールの高津宮に到着しました。ここは、古い歴史を持つ神社であるとともに、江戸時代には上町台地から西側の大坂のまちが眼下に広がる眺望の名所でした。



**小谷 真功さん
(高津宮宮司)**

古典落語「高津の富」の舞台にもなった高津宮は、昔から人々がにぎやかに集う神社です。現在も大阪の伝統文化にちなんだイベントをたくさん行っています。江戸時代は、ここから海まで大坂のまちが見渡され、雪見をはじめ眺望の名所として、当時の観光のルートにも入っていたところ。境内や付近には茶店があつて、湯豆腐屋もあり、花の名所「吉助牡丹」などもありました。少々怪しい薬を売る黒焼き屋もあり、これも落語の題材になっています。かつては芝居街だった道頓堀は、すぐ西側にあり、歌舞伎役者や人形浄瑠璃の人形遣いなども住んでいて、芸能にも関係が深い場所でした。

高津宮

(『浪華の賑ひ』暁鐘成、安政2(1855)年、大阪市立中央図書館所蔵)



『浪華の賑ひ』のうちの「高津」。近景に大鳥居、遠景に町家や船と海、北摂の山並みを描く。

幕末の大坂を 心の中で一望

〈なにわのながめ 其の一〉

白縁齋梅好は『浪花のながめ』の中で、高津の社の「龍の瓦」に触れたのち、「正面にハ海山を一目にながめ、眼下にハ枝川の橋を行き通ふ諸人見へわたり民の家数ハ一目千軒とやいハん万軒とやいハん、朝な夕な芝居太鼓に耳を悦こばす風けい、ことの葉にのべがたし／高き家のぼり龍じやといふらしあめか下にて名をやながさん」と記述。台地東崖とは異なる、町家、市中の堀割、海と山からなる風景を捉えています。『浪花のむめ』には「高台にのほりて暮の雪ミれば民のかまとのうハぬりかさね」との歌があり、雪に彩られた町家の様子もうかがえます。

高津宮 (中央区高津1丁目1)

上町台地の西の崖沿いに、仁徳天皇を主たる祭神として鎮座する高津宮は、江戸時代において、言わずと知れた眺望の名所でした。

(『浪花百景』高津 芳瀧画、
安政年間(1854~60年頃)、
大阪府立中之島図書館所蔵)



〈なにわのながめ 其の二〉

暁鐘成は『浪花の賑ひ』の「高津」の中で、

「遠眼鏡屋の云ふ、まづ最初正面にみえまするは道とんぼり川の橋々より芝居やぐら・ひいき幟、むかふは安治川・天保山、入ふね出ふねのけしき、右は摩耶山・武庫山・甲山、前は町々東西の御堂、左はなんば鉄眼・今宮のえびす・木津川口・千本松の風景・淡路島より須磨の浦へかよふ千鳥のなく声も耳へあてたれば聞こえますとは、あまり出たらめの口上なり、高津といへど豆腐のあたひ〔値〕いたつてひくし、風景は一にして二じるしの腹をなほす、

難波津に名も高き家のゆどうふはきやく〔客〕おほきみと賑ひにけり」と、眺望を解説する遠眼鏡屋の口上、そして高津名物の湯豆腐の様子を鮮やかに記述しています。

クイズ Quiz 4

Q 江戸時代、「高津」の名を冠する名産の一つに高津瓦(高原瓦)があり、中寺町の北から空堀にかけて土取場がありました。暁鐘成は「摂津名所図会大成」の中で、次のように高津の土の良さをたたえていますが、焼いた瓦をたたく音は何に例えられているのでしょうか？

「其土最(いと)強くして色青く、瓦に焼いて美しく、響きあたかも [] の如し」

- ① 銀(しろがね) ② 茶器 ③ 鎮(かね)

ゴール

高津宮でのクイズは、時間切れで出題できず(用意されていた第4問は、高津の土の問題)。



イベントなどのちらしやポスターが並ぶ高津宮の告知板に、「上町台地 今昔タイムズ」第3号も掲示中。